

WHO 本部口腔保健プログラム

長崎大学 熱帯医学・グローバルヘルス研究科

高瀬 絢



はじめに

私は2018年1月8日から同年2月28日までの2か月間、スイス・ジュネーブにある世界保健機関(World Health Organization; WHO) 本部にてインターンシップを経験したので、ここに報告する。



同室のインターンたちと(手前が筆者)

背景

私が所属する長崎大学熱帯医学・グローバルヘルス研究科では、海外でのインターンシップと開発途上国での実地研究が必須である。大学で口腔保健学を専攻し、歯科衛生士としてのバックグラウンドをもつ私は、ケニアで口腔保健に関する研究を企画しており、う蝕や歯周病に関するデータ収集のために WHO のデータベースを利用していた。そこから、世界の口腔保健に関するデータがどのように集められ、データベース化されているかに興味を持ち、また、世界の口腔保健を先導するために WHO 本部がどのような役割を担っているのかを学びたいという考えから、WHO

本部口腔保健プログラムにてインターンシップを行った。

WHO 口腔保健プログラム

WHO 口腔保健プログラムは、非感染性疾患予防(Prevention of Noncommunicable diseases; PND) 部門ヘルスプロモーションユニットの中に位置し、国際口腔保健のリーダーとして、口腔保健推進・疾患予防のため、規範・基準の設定、エビデンスに基づく政策課題の提唱、各国への技術支援、研究課題の決定、口腔保健状態のモニタリングや評価を PND 部門、他部門、外部のパートナーと協同で行っている。

世界の疾病負担研究(Global Burden of Disease Study, GBD 2016)によると、全世界の半数が口腔にかかわる疾患に罹患しており、さらに世界で最も多い疾患が、永久歯う蝕であると報告されているにも関わらず、特に途上国においては、生死に関わる疾患と比べると口腔保健の優先度は低い。ところで、現在、世界の70%の死は、がん、糖尿病、心血管疾患といった非感染性疾患由来であるといわれているが、タバコ、アルコール、過度な砂糖摂取等は、非感染性疾患と口腔疾患の共通リスクファクターである。したがって、口腔保健プログラムでは、共通リスクファクターコントロールを介した口腔保健推進・疾患予防の非感染性疾患予防への統合を提唱している。

インターンシップ内容と成果

筆者は、今回のインターンシップで、

- 1) 口腔保健プログラムがWHO コラボレーティングセンターであるスウェーデンマルモ大学と共同で管理している WHO 国際口腔保健データベースのデータを精査し、WHO の Global Health Observatory (WHO GHO) にう蝕のデータを移行するサポート
- 2) 2019 年末完成予定の WHO 世界口腔保健レポート作成のための、口腔保健に関する疫学、政策に関する情報収

集のための質問票調査実施
に携わった。

国が口腔保健に関する戦略を考える際、正確なデータが必要であるが、WHO 国際口腔保健データベースには、ほぼすべての WHO 加盟国のデータがあるものの、WHO が推奨する 5、6 年毎に定期的に口腔保健調査を実施している国は、加盟国全体の 3 分の 1 にも満たず、そのほとんどが先進国であった。また、地域のデータはあっても、国全体の口腔保健に関するデータがない国も多く、タイムリーで質の高いデータを収集することが今後の課題であることがわかった。

また、日々の業務を通して、口腔保健プログラムが、タバコや栄養、ユニバーサルヘルスカバレッジ等の様々な WHO のプログラムや外部のパートナーたちと日々話し合いを重ね、問題解決に向けて働いていることを学んだ。

おわりに

WHO での研修経験を経て、世界の口腔保健が抱える課題とそれに向けた動きを学ぶことが出来た。それと同時に、世界各国から集められたインターンたちとの交流から多くの刺激を受け、日本人が国際機関で働くということの意

義も感じた。特に口の健康は、生活の質を大きく左右し、高齢者ではそれが顕著である。世界の人口がますます高齢化していく中で、日本の知見を海外に発信していくことが私たちの使命であると考えている。



ヘルスプロモーションユニットのメンバーとの
カフェテリアでのランチ（左手前が筆者）

最後に、今回の研修を終始支えて下さったスーパーバイザーの牧野由佳先生、サブスーパーバイザーの錦織信幸先生、長崎大学の神谷保彦教授をはじめ、口腔保健プログラムの皆様、(公社)日本 WHO 協会様、その他関係者の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。